

Title	日本語複合動詞「V1 + 込む」の多義構造に関する認知言語学的研究
Author(s)	苏, 晓笛
Citation	大阪大学言語文化学. 2023, 32, p. 99-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91160
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語複合動詞「V1 + 込む」の多義構造に関する 認知言語学的研究*

蘇 曉笛**

キーワード：複合動詞、多義構造、ネットワーク・モデル

“V1 + 込む”作为词汇型复合动词，其结合规则却并不符合影山（1993）所提出的“他动性调和原则”，可与“～込む”结合的前项动词高达200多个，是词汇型复合动词之最。另外我们发现，“～込む”与其前项动词之间包含了“手段型”（投げ込む）、“样态型”（流れ込む）、“V2 补助型”（老け込む）等多种语义关系。基于其语义关系的复杂性与多样性，在日语教学方面，如何把握复合动词“V1 + 込む”的多义结构成为一大难点。本文试图从认知语言学的角度出发阐明以下三个问题。

- a. “V1 + 込む”的前项动词具有怎样的词义特征？其与后项动词“～込む”之间又有怎样的语义关系？
- b. 如何把握“V1 + 込む”的语义扩张机制？
- c. 如何构建“V1 + 込む”的多义结构？

首先，基于前后项动词的语义关系，本文将“V1 + 込む”的语义分为“向某领域的内部移动，并固着”（类型1），“充分行使V1所表示的行为”（类型2），“V1所指状态的程度深，激烈”（类型3）三大类。类型1的前项动词多为动作性动词，类型2的前项动词可分为“由量变易引起质变的动词”和“由量变不易引起质变的动词”两类，类型3的前项动词多为安定的状态性动词，具有未完了动词的性质特征。以往研究指出，类型1在使用中隐含特殊语感，但对其产生的理由并未给予解释。本文认为，对于“V1 + 込む”语义特征的深层次阐释离不开“容器”这一建立于身体经验之上的意象图式。基于“容器图式”的性质及“固着”这一语义要素我们分析发现，某容器内部要达到“固着”这一“结果状态”，除了“向某领域的内部移动”之外，还需“移动物数量大”，“时间长”，“向容器深处移动”，“内部移动行为伴随某种意图”，中至少1种要素的介入。此发现可对“V1 + 込む”隐含特殊语感的原因进行解释说明。

再次我们认为，类型1为原型语义，类型2、3为其扩张语义。其中，类型1至类型2

* 关于日语复合动词「V1 + 込む」多义构造的认知语言学研究（苏晓笛 SU Xiaodi）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

的扩张与语用强化密切相关。类型1和类型3之间存在 [CHANGES ARE MOVEMENTS] 这一概念性隐喻。此外我们发现，“～込む”所对应的本动词为古语“こむ”，背后潜藏着自动词，他动词两种语义。基于此发现，我们认为类型1为“空间浓密状态”，类型2为“行为浓密状态”，类型3为“抽象浓密状态”，从而将“V1 + 込む”的超级上位语义定义为“达到某种浓密状态”。基于以上三种语义类型之间的水平关联性以及与超级上位语义之间的垂直关联性，本文利用 Langacker (1991) 所提出的多义网络模型搭建出了“V1 + 込む”的多义结构体系。

1 はじめに

「V1 + 込む」¹は日本語の語彙的複合動詞²の中で数が一番多く、特殊な存在であると多くの研究で指摘されている（影山, 1996; 姫野, 1999; 松田, 2004; 陳・松本, 2018）。「門の中へ駆け込む³」、「使い込んで赤字になる」、「冷え込んだ体を温める」のように、いずれも後項動詞は同じ「～込む」であるが、表す意味が同一ではない。日本語母語話者にとって、「V1 + 込む」は、V1 と「こむ」2つの動詞の組み合わせからなる「複合動詞」より、一まとまりの語彙項目として認識され、用いられていると考えられる。しかしながら、「V1 + 込む」全体の意味はV1 と「～込む」の足し合わせだけでは説明しきれず、それ以上の意味を持つ場合が多く見られる。

そこで本稿はこのような多様かつ複雑な意味を持つ「V1 + 込む」を研究対象⁴とし、a. 「V1 + 込む」の前項動詞はどのような意味特徴をもつか。後項動詞「～込む」とどのような意味関係をもつか。b. 「V1 + 込む」の意味拡張のメカニズムはどうなっているか。c. 「V1 + 込む」の多義構造をどのように構築するか、3つの課題を取り上げる。

以下では、2節で、本研究テーマと関連する先行研究を概観し、残された課題を指摘する。3節では、本稿で依拠する認知言語学の枠組みを紹介する。4節で、「V1 + 込む」の意味・用法を3つのパターンに再分類したうえで、各パターンにおけるV1の意味的特徴、V1とV2の意味関係を明らかにする。考察結果に基づき、イメージ・スキーマによる「V1 + 込む」の意味記述を行う。5節で、認知的動機づけに基づき、「V1 + 込む」の意味拡張メカニズムを明らかにし、ネットワーク・モデルによる「V1 + 込む」の多義構造の構築を試みる。6節はまとめである。

¹ 本稿では、本動詞、後項動詞、複合動詞をそれぞれ「こむ」、「～込む」、「V1 + 込む」と表記する。

² 影山 (1993, 1996) は「概念意味論」の立場から日本語の複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に分けている。語彙的複合動詞とは統語上1つの語として存在するものであり、前項動詞と後項動詞が特定の意味関係にあるものである。

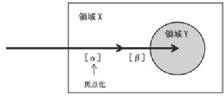
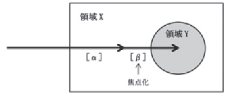
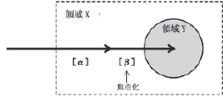
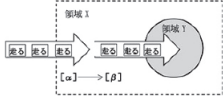
³ 例文中の下線は筆者によるものである。

⁴ 複合動詞の全体の意味がV1とV2の意味、意味関係から合成的に導き出すことが難しい、また複合動詞全体の意味からV1とV2の役割を認定するのも困難である語彙項目（申し込む、仕込む、見込む、など）については、本稿の分析対象としない。

2 先行研究

「V1 + 込む」に関する先行研究として、姫野（1978, 1999）、松田（2004）などが挙げられる。姫野（1978, 1999）が「～込む」の意味用法の細かな分類に主眼を置いているのに対し、松田（2004）は語彙習得に主眼を置き、表1のように、「～込む」の意味用法をA、B、C、Dの4つに分類している。また、図1の単一の「コア図式」⁵の焦点化移動によって「～込む」の多義性を記述している。以下、本稿と同じ立場をとる認知言語学的アプローチによる松田（2004）の研究を主に紹介する。

表1: 「～込む」の用法の分類およびイメージ図式（松田2004: 75-85 参照）

二格を伴う「～込む」		二格を伴わない「～込む」	
Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
V1は「内部移動」を 含意しない	V1自体は「内部移動」 を 含意する	V1が示す状態への変 化とその状態への固着	V1の反復行為により 生じる状態変化（目標 に向けて）
例) 飛び込む、 呼び込む	例) 入り込む、 植え込む	例) 冷え込む、 眠り込む	例) 十分に走り込む
			

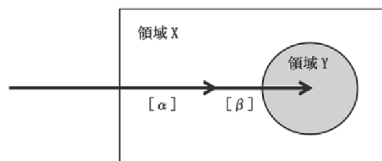


図 16: 「～込む」のコア図式（松田2004: 75）

各意味間の拡張関係に関して、松田によれば、CタイプはBタイプの物理的な場所へ「しっかり、きちんと、奥深く」行為を行うというイメージが抽象レベルに拡張した用法であり、Bタイプと同様、[β]と前項動詞が表す状態への固着が焦点化されている。また、Dタイプの獲得プロセスについて、松田は「DタイプはAタイプの『入る・入れる』とBタイプの『しっかり、きちんと、奥深く』行為を行うという二つのイメージが合わさって、抽象レベルへ拡張した用法であると考えられる」と主張している。

⁵「コア」に関して、松田（2004: 68-69）で「語の意味の全体を見渡すことのできる円錐形の頂点のようなものを表す概念であり、典型、非典型を問わずすべての用例の背後にある抽象的な概念である」と定義されている。

⁶領域Yは領域X内の「難可逆的な領域」をイメージしたものである（松田2004）。

4つのタイプの「～込む」に共通しているコアの意味に着目し、「～込む」の意味構造を明らかにしようとする松田（2004）の研究には大きな意義が認められる。しかしながら、以下の点に関して、さらに検討する余地があると考えられる。

- (ア) 姫野（1999）によると、「内部移動」（松田のAタイプとBタイプにあたるもの）を表す「～込む」は「内部移動」の意味以上のニュアンス⁷を伴う。松田は、これらのニュアンスは「β」が焦点化されるBタイプ（入り込む、住み込む、など）に生じやすいと主張しているが、「患者を診察室に??呼び込む」（作例）、「娘を実家に??連れ込む」（作例）の容認度の低さからわかるように、「α」が焦点化されるAタイプにも特別なニュアンスが伴う。つまり、「β」はAタイプにおいてもBタイプにおいても、無視できない重要な意味要素であると言える。そこで、本稿は、「内部移動」を表す「～込む」の意味を2つに分けて記述するより、「V1 + 込む」複合動詞全体に着目し、一まとまりとして記述した方がより良いと考える。
- (イ) 「走り込む」、「煮込む」、「磨き込む」のように、Dタイプには「人の技や対象とする事柄の質を向上させる」という目標が伴う点において、松田は姫野（1999）と同じ主張をしている。松田によると、この場合、領域Xは「満足できる状態」を表し、領域Yは「目標が達成できる状態」を表す。しかしながら、「着込む」、「買い込む」のような例には、何らかの目標が伴っているとは考え難い。これらの例をどのように解釈すべきかを検討する必要がある。また、「走り込む」のような例に伴う「目標」はあくまでも「…のために」、「…と、…なる」のような文脈によるものであり、「～込む」の意味の一部であると言えるだろうか。さらに、松田は、DタイプはAタイプとBタイプから拡張された用法であるとしているが、この獲得プロセスの動機づけに関しては言及していない。
- (ウ) コア図式による多義語の意味記述は抽象しすぎて、日本語母語話者の心理的実在と合致しているとは考え難い。また、「～込む」の4つのタイプは同じような図式で記述されているため、学習者にとって、中心義と拡張義の間の関連性が明確とは言えない。したがって、母語話者の心理的実在をどのように記述するか、また、学習者にとってどのような意味記述が有益かについてさらに検討する必要がある。

⁷ a. 全体がすっかり奥深く入るという感じがある（入り込む）； b. 一旦入ったら動かないという固定感がある（はさみ込む）； c. 予期せぬものが入るという抵抗感がある（住み込む）； d. 人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じがある（書き込む）という4つのニュアンスである（姫野 1999: 78-81）。

3 理論的枠組み

本節では、本稿が考察を進めるに当たって依拠する認知言語学の枠組みのうち、イメージ・スキーマ理論⁸とネットワーク・モデルについて概説する。

本稿は「V1 + 込む」の意味に関わる身体的・経験的基盤として、〈容器〉のイメージ・スキーマと〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマの2つがあると主張する。

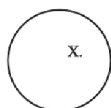


図 2: 容器のイメージ・スキーマ

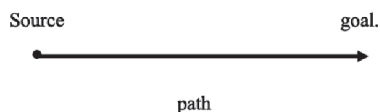


図 3: 〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマ

我々人間は自分の身体構造、また日常経験に基づき、「何かの中に何かがある」というイメージがよく浮かぶ。この抽象的なイメージを構造化したものが〈容器〉のイメージ・スキーマと呼ばれる。Johnson (1987: 19-22) は、イメージ・スキーマが複数の感覚経験にまたがって成立するとし、特に〈容器〉のイメージ・スキーマに関して、少なくとも次の5つの性質が伴うと指摘する。本稿ではこの5つの性質が「V1 + 込む」の意味を解釈することに繋がると主張していく。

- (1) (i) 容器は外部からの力を遮断または和らげる；(ii) 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる；(iii) 容器の中のものとは比較的位置が変わらない；(iv) 容器の中の中ものは内部のものには見やすく、外部のものには見にくい；(v) 容器には推移性が働く。(Johnson, 1987: 19-22; 訳は鍋島 2002)

また、物理的空間移動に関する身体経験から抽出された〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマも「～込む」の多様な意味形成に関わると考える。〈起点〉と〈着点〉が〈原因〉と〈結果〉に写像され、〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマを物理的移動から物事の因果関係に拡張することがある。

例えば、(2) のように、本来、空間的領域の〈起点〉、〈着点〉を提示する前置詞 from, to が、〈原因〉 (overwork)、〈結果〉 (a dollar) を表す。

(2) a. She is tired from overwork.

b. The pottery has gone down to a dollar.

(山梨 2001: 187-188)

⁸ Johnson (1987) によると、イメージ・スキーマとは、移動や物体の操作など、空間的な身体経験の中で繰り返し生じるパターンを抽出した構造体である。

<容器>と<起点—経路—着点>という2つのイメージ・スキーマを用い、「V1 + 込む」の意味を記述するのが学習者の語彙理解を深める手助けとなると考える。

また、実際の言語使用から考えると、学習者の頭の中に最初に想起されやすいのは必ずしも「コア」的な意味ではなく、ある程度具体性のある意味であると考えられる。したがって、本稿は「V1 + 込む」の多義構造を記述する際、松田 (2004) の単一なコア図式ではなく、Langacker (1991) が提案する具体的なレベルの意味から抽象的、スキーマ的な意味を抽出するボトムアップ型のネットワーク・モデル (図4) を援用する。このネットワーク・モデルはプロトタイプ・カテゴリー観とスキーマ・カテゴリー観⁹の2つの概念が関わるため、学習者にとって、「V1 + 込む」の複雑な多義構造の全体像をコア図式よりも把握しやすいと考えられる。

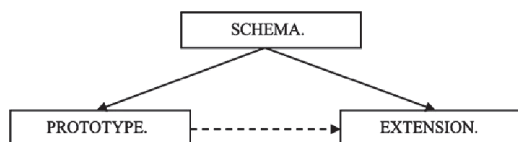


図4: ネットワーク・モデル (Langacker 1991: 271)

4 「V1 + 込む」の多義考察

4.1 パターン1 (ある領域の内部へ移動し、固着する)

姫野 (1978, 1999) でも指摘されているが、意味パターン1の場合、(3) のようにすでに存在する内部領域「車」へ移動する場合もあれば、(4) のように、V1「囲う」という動作が行われることによってはじめて内部領域ができる場合もある。

パターン1には、このような物理的な内部移動以外、虚構的内部移動、抽象的な内部移動を表す場合もよく見られる。例えば、(5) は通常物理的移動ではなく、静止した「カーブ」の形を「切れ込む」という移動表現で表す「虚構的移动」(Fictive Motion)¹⁰ である。この場合、単独動詞「切れる」に書き換えても意味がほとんど変わらないことから、「～込む」はここで「切れる」という進行方向の変化の激しさを副詞的に修飾していることがわかる。つまり、「切れ込む」を用いる場合、「カーブ」はそれ自体が急に切れることによってできた内部領域に固着し、深く曲がっている状態から元の状態に戻しにくいことを表す。

⁹ 早瀬・堀田 (2005) によると、スキーマ・カテゴリー観は、カテゴリー成員がすべて共通する抽象的なスキーマを満たしていれば、そのカテゴリーの一員として認められるという立場を取る。一方で、プロトタイプ・カテゴリー観とは、プロトタイプ的な事例からそれと類似性が低い周辺の成員へと放射状に拡張していく複合的なカテゴリー体系である。

¹⁰ Talmy (1996) によると、Fictive Motion とは、物理的には静止した状態にある対象を、虚構的に移動しているものとして表現することである。

- (3) 朝早く、迎えに来てくださった車に悠然と乗り込む私でした¹¹。
 (4) 完全に庭をフェンスや壁などで囲い込む必要はないが、(…)
 (5) 右に切れ込むカーブより、左に切れ込むカーブが好き。(cf. 右に切れるカーブ)

また、(6)の「落ち込む」は、物理的移動を表す(6a)同時に、社会的、心理的領域といった抽象的な領域への移動をも表す(6b-c)。これは物理的領域と抽象的領域間における意味写像であり、概念メタファーによって関連付けられている。

- (6) a. その羊が、穴に落ち込んで、命の危険にさらされた。
 b. (…) 日本の食料自給率は回復不能な水準に落ち込むだろう。
 c. 眠れなくて食欲も落ちて気分がものすごく落ち込んでいた頃、(…)

先述したように、姫野(1999)は「内部移動」を表す「～込む」に4つのニュアンスが伴うと主張しているが、その理由に関して言及していない。本稿は(1)の<容器>のイメージ・スキーマに関わる性質に基づき、「V1 + 込む」の使用に伴う特別なニュアンスは<固着する>¹²という意味要素から生じたものであると主張する。

<容器>の性質(i-iii)が示すように、<容器>は比較的密閉した空間であることから、ものが一旦<容器>の中に入ると動くことや外に出ることが難しく、<容器>の中に閉じ込められた状態になる。また、<容器>は限られた空間であるため、通常、その中のものが大きければ大きいほど、または多ければ多いほど、動きが困難になり、<固着>が想定される。ここでの<固着する>は多くの場合、主観的、心理的な<固着>を指し、必ずしも移動物が移動先から出られないわけではない。

<移動物>が<容器>の中で<固着する>ようになるには、<ある領域の内部へ移動する>のみでは実現しにくく、他の「+ a」の要素が必要となる。言い換えれば、「V1 + 込む」の使用には必ず何らかの「+ a」の要素が介在している。本稿は、(7-10)が示すように、「移動物の数が大きい」(運び込む)、「時間が長い」(泊まり込む)、「容器の奥まで移動する」(吸い込む)、「内部移動の行為に意図性が伴う」(呼び込む)の少なくとも4つの「+ a」の要素が関わっていると考えられる。

- (7) 船いっぱいの荷物を料理屋の倉庫に運び込むのが仕事だ。

¹¹ 引用元が明記されていない例文は全てWebデータに基づく複合動詞用例データベース(開発版)から収集したものである。

¹² ここでの<固着する>は元の位置に戻れるのが期待されない、ある領域の内部に固着することを表し、姫野(1978, 1999)の程度進行に分類される「固着化」の「固着」とは異なる概念である。

- (8) 繁忙期の5～11月は会社に泊まり込むことも多く、(…)
- (9) (…) 息を吸い込むときは吸い込んだ空気は下腹部まで浸透していく状況 (…)
- (10) 日本の医療の質は高く、一時、海外から患者を呼び込もうというメディカル・ツーリズムが話題になりました。(cf. 患者を診療室に呼び入れる／??呼び込む)

(7) のように、「運び込む」は荷物の数が大きい文脈でよく用いられる。「荷物」の数が多い場合、「固着」になるのが連想されやすい。(8) は、「5～11月」という長期間であるため、「固着」と結びつくのは妥当であると考えられる。(9) の「下腹部まで浸透していく」は腹の奥まで吸うことを表し、その結果として「固着」が想起される。(6-8) と比べ、(10) に含意される「固着」はより主観的なものだと考えられる。(10) では、単に患者を日本に呼び入れるだけではなく、患者にしばらくの間日本に滞在して、治療を受けると共に、旅行もしてもらうことにより、日本の医療の向上、観光産業の発展をはかることが目的である。このような意図を強調するには、「呼び入れる」より「呼び込む」のほうがより適切である。

以上、＜固着する＞を実現する手段として、＜ある領域の内部へ移動する＞以外、少なくとも以上の4つの「+ a」の要素が必要となる。＜固着する＞という意味要素は、パターン1の「V1 + 込む」がどのような文脈で生起するかを左右し、無視できない重要な役割を担う。したがって、本稿は、松田(2004)のA、BタイプにおけるV1の意味の違いには焦点を当てず、2種類のV1を統合し、「V1 + 込む」複合動詞全体の意味をパターン1と記述する。パターン1にくるV1の意味特徴を考えると、内部移動事象を引き起こす手段(叩き込む)、原因(溶け込む)、またはそういった移動事象の移動様態(舞い込む)、付帯事象(怒鳴り込む)などとして認められる動作性動詞がよく見られる¹³。

以上のような特徴を踏まえて、本稿は、＜容器＞のイメージ・スキーマと＜起点—経路—着点＞のイメージ・スキーマを組み合わせて、パターン1のイメージ・スキーマを図5のように描く。矢印は＜ある領域の内部へ移動する＞という行為を指す。また、＜固着する＞という意味を示すために、着点領域を表す丸を太線で表示している。



図5: 意味パターン1のイメージ・スキーマ

¹³ 陳・松本(2018)の分類に基づくものである。陳・松本(2018)は、V1とV2の意味関係に基づき、日本語の語彙的複合動詞を原因型(溶け落ちる)、手段型(叩き壊す)、前段階型(割り入れる)など13種類の意味タイプに分けている。

4.2 パターン2 (V1 が表す行為を十分に行う)

パターン2はパターン1と同様、＜原因(手段)＞と＜結果＞の意味関係を取る2つの要素と関わっているが、＜原因(手段)＞はパターン1の＜ある領域の内部へ移動する＞の代わりに、＜V1が表す行為を十分に行う＞になっている。また、＜結果＞はパターン1の＜固着する＞の代わりに、＜V1が表す行為を十分に行う＞ことによって引き起こされる結果状態を指す。ここでの結果状態はV1の意味特徴によって異なる。以下、結果状態の違いに基づき、「量的変化」¹⁴によって「質的变化」が起こりやすいV1と「量的変化」によって「質的变化」が起こりにくいV1に分けて考察する。

(11-12) が示すように、「煮る」、「洗う」が表す行為の「量的変化」によって、「透き通る」、「古着の味が出てくる」といった「質的变化」が起こりやすいと考えられる。

(11) もやしを入れて透き通るくらいまで煮込む。

(12) さらに洗い込むことによって古着の味が出てきます。

パターン2はV1が表す行為の「量的変化」を意味するが、語用論的推論によって、「質的变化」が注目される場合がある。例えば、「よく磨き込んだ黒の革靴だった」という文では、「タ形」を取ることで「革靴の美しいツヤが出ているピカピカの状態」という「質的变化」が認知的に焦点化されている。

一方、「量的変化」によって「質的变化」が起こりにくいV1と結合する場合、＜V1が表す行為を十分に行う＞結果、「量の増加」しか得られない。「買い込む」、「着込む」が挙げられる。「買う」、「着る」といった行為は「質的变化」を引き起こしにくいので、「～込む」と結合し、「大量のものを買う」、「服を何枚も重ねて着る」ことを表す。

以上の分析に基づき、パターン2の意味をイメージ・スキーマで示すと、図6のようになる。＜V1が表す行為を十分に行う＞ことを表すために、矢印を図5より太く表示している。また、＜V1が表す行為を十分に行う＞ことによって達した結果状態は推論によるものであるため、破線の丸で表示している。



図6: パターン2のイメージ・スキーマ

¹⁴ ここでの「量」は前項にくる動詞の性質によって表すものが異なる。通常、「時間的長さ」、「回数」、「目的語の数」を指す場合が多い。

以上の考察から、(1) で提示した<容器>のイメージ・スキーマに関わる5つの性質に加え、6つ目として (vi) 「容器の中のものが一定の量に達すると、密度が高くなるか質的变化が生じる」という性質も付け加える必要があると言えるだろう。

4.3 パターン3 (V1 が表す状態の程度が激しい・深い)

姫野 (1999) は程度進行の様態に従い、「固着化」(黙り込む)、「濃密化」(老い込む)、「累積化」(走り込む) という3つのグループに分けている。3つとも動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達する。本稿は姫野の「固着化」と「濃密化」¹⁵を統合し、パターン3<V1 が表す状態の程度が激しい・深い>にする。パターン1、2と比べ、状態のあり様に注目するのがパターン3の特徴である。

以下の「惚れ込む」のような「固着化」に属する語例が使用文脈によって状態の変化の程度、いわゆる「濃密化」を表す場合もある。

(13) 母親はトニーの人柄にすっかり惚れ込むが、父親は (…)

(13) の「惚れ込む」は「すっかり」、「ますます」のような副詞と共に起ることによって、「惚れる」の程度の変化、いわゆる「濃密化」として捉えることが可能である。つまり、姫野の「固着化」と「濃密化」はあくまでも使用文脈によって生じるものであり、その間にある種の伴随関係があると考えられる。それゆえ、本稿は便宜上、パターン3の意味を<V1 が表す状態の程度が激しい・深い>と記述する。

また、パターン3に属する語彙項目(枯れ込む、冷え込む、寝込む、信じ込む、など)の前項動詞は均一的な状態性を持っており、以下のように、未完了動詞(imperfective verb)¹⁶と同じ性質を持っていると考えられる。

①内部が均質で、動的ではない。安定した状態が続いている。

②始まりと終わりがプロファイルされていない。関連する期間内、状況が一定である。

つまり、未完了動詞の表す事態はその起点と終点が背景化しており、始点と終点を除いた内部のみがプロファイルされている。このような動詞は「～込む」と結合すると、真ん中の状態がさらに注目され、激しい・深い状態になると考えられる。

¹⁵ 姫野 (1999: 69) によると、「固着化」は、動作・作用の進行の結果、ある状態に到ったまま固定化しているというものである。「濃密化」は、程度が高まり、状態が昇進していくものである。

¹⁶ Langacker (2008) は動詞の語彙的アスペクトに注目し、動詞を完了動詞と未完了動詞2つの対立的な概念に分けている。

また、姫野（1978, 1999）が指摘するように、「思う」、「信じる」のような認識動詞に「～込む」が結合した場合、ト格がとる内容が現実と違い、正しいとは限らないというニュアンスが含まれる。例えば、(14) の「信じ込む」の場合、「人」が頭の中で強く信じている「真実」は正しくないもので、現実世界では「捏造記事」である。

(14) 捏造記事を真実と信じ込む人がいても不思議ではありません。

これは、(iv) 容器の中のものは内部のものには見やすく、外部のものには見にくいという容器のイメージ・スキーマの性質から説明できるだろう。つまり、認識主体である「人」は「真実と信じる」という認識状態が詰まった抽象的な容器の内部へ移動し、そこに固着したため、現実世界という容器の外部における正しい認識にアクセスするのが難しくなる。一方、発話者は容器の外部から容器の内部にあるものを見ているため、ト格がとるものが正しくないというニュアンスが生じやすいと考えられる。

パターン3の意味をイメージ・スキーマで示すと、図7のようになる。丸はV1が表す状態を指す。矢印は時間的推移によって、V1が表す状態の程度変化を表す。状態が激しい・深いことを表すため、一番太い実線で表示している。破線で表示される丸は焦点化されていない部分、すなわち、激しい・深い状態になる前の状態を表す。



図7: パターン3のイメージ・スキーマ

5 「V1 + 込む」の多義構造

5.1 「V1 + 込む」の意味拡張のメカニズム

(15-16) のように、パターン1とパターン2両方の意味・用法を持つ語彙項目がよく観察されることから、この2つの間には何らかの関連性があると考えられる。

- (15) a. 携帯でメールを打っている若者がいれば、奪い取って川に投げ込む。
 b. 冬場、通常の公式球より約100グラム重い240グラムの特殊球を1日おきに50～60球投げ込んできたことで(…)
- (16) a. (…) ガラスや陶器に絵を描き込む仕事を手掛けるようになった。
 b. ある程度絵を描き込んでから、今度は理論というかそういう感じの部分について勉強してみると、理解も早まるし良いのではないかと。

次は、「投げ込む」を例に取り上げ、それに関わる4つの文脈を通じて、パターン1からパターン2への意味拡張プロセスを検討していく。

- (17) a. ボールを変化させずに最短距離でミットまで投げ込む (…)
 b. 監督島岡吉郎の下で毎日500球を投げ込むほどの猛練習を重ね、高橋とともに投手陣を支えた。
 c. 久しぶりに1時間ほど投げ込むが、筋疲労により右腕が言うことを聞かず、ほとんどのボールが右下へずれる。
 d. BH戦終了後から集中的に投げ込んでアップ。

(17a)は、移動物(ボール)がある物理的領域(ミット)の内部への移動を表し、パターン1に属する。(17b-c)の場合、移動物(球)の移動先は明示されなくなる。(17d)になると、移動先が不明瞭で、パターン2としての用法になる。つまり、例(17b-c)のように、「500球」、「1時間ほど」など「量」に関わる表現は頻繁に「投げ込む」と共起することによって、「～込む」に内部移動の意味が徐々に失われる一方、「量」の意味合いが組み込まれるようになり、パターン2としての用法が定着されるようになる。

このように、あるコンテキストにおける繰り返しが、表現と意味との新しい結びつきにつながる現象は、「語用論的強化」(Traugott, 1988など)とみなされる。以上の分析により、パターン2の意味獲得は語用論的に強化された結果であると言えるだろう。

次にパターン1からパターン3への意味拡張プロセスについて検討する。これには[CHANGES ARE MOVEMENTS]という概念メタファーが関わっていると考えられる。

この2つの概念領域内における要素の対応関係を<起点—経路—着点>のイメージ・スキーマで表示すると、図8になる。つまり、パターン1における外部領域から内部領域への物理的な空間移動は、パターン3における変化前の状態から変化後の状態への抽象的な状態変化に対応している。

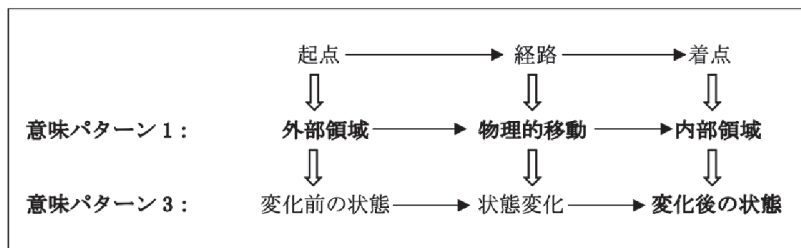


図8: 意味パターン1と意味パターン3の2つの概念領域間の意味写像

ただし、太字が示すように、パターン1の場合、「外部領域」から「内部領域」への移動過程が意味の中に含意されているが、パターン3の場合、変化前の状態から変化後の状態への状態変化の過程が背景化されており、状態変化が終わった後の結果状態のあり様が焦点となっている。

また、パターン1「物理的空間移動」の結果<固着する>とパターン3「抽象的状态変化」の結果<V1が表す状態の程度が激しい・深い>も対応している。<固着する>は、移動物が元の位置に戻るのが難しく感じることを表す。また、<V1が表す状態の程度が激しい・深い>は、V1の表す状態が元の状態に戻るのが難しく感じることを表す。つまり、<固着する>という起点領域での意味要素が目標領域に写像されていると考えられる。従って、パターン1とパターン3は「CHANGES ARE MOVEMENTS」という概念メタファーによって関連づけられている。

5.2 「V1 + 込む」のスーパー・スキーマ

「V1 + 込む」のスーパー・スキーマを認定する際に、「～込む」に対応する本動詞「こむ」の意味について確認しておきたい。「～込む」に対応する本動詞は現代語の「こむ」であると考えられる場合、「V1 + 込む」は「他動性調和の原則」¹⁷に違反する語彙項目になってしまう。角川古語大辞典（第二巻）を確認したところ、古語の「こむ」には非対格自動詞的な意味以外に、他動詞的な意味もある。このことから、「～込む」の根底にあるのは現代語の「こむ」ではなく、古語の「こむ」であると考えられる。

影山（2001）によると、他動詞は<行為>-<変化>-<結果状態>という一連の要素からなるものであり、非対格自動詞は<変化>-<結果状態>のみが注目される。これに基づき、「～込む」の意味を「中へ入れて外へ出さないようにする（他動詞としての意味）→狭い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる（自動詞としての意味）」という1つの内部移動事象として認識できる。

この事象はパターン1<ある領域の内部へ移動し、固着する>が表す意味とほぼ同様である。パターン1での<固着する>というのはある空間の内部での「固着」であるため、ある種の「空間の濃密状態」になると考えられる。パターン2は量的行為を表し、「行為の濃密状態」として捉えられる。また、パターン3は「抽象的な濃密状態」であると考えられる。つまり、3つのパターンは「濃密状態」の形がそれぞれ異なるが、「何らかの濃密状態になる」という点で共通している。したがって、本稿はくなんらかの濃密状態になる>を「V1 + 込む」のスーパー・スキーマ的な意味として認定する。

¹⁷ 語彙的複合動詞の結合には「外項」をとる動詞同士が「外項」をとらない動詞同士によって作られるという「他動性調和の原則」がある（影山1993）。

5.3 ネットワーク・モデルの構築

経験主義的な用法基盤言語習得モデルから考えると、母語話者は自分のさまざまな言語経験、出会った具体的な語彙用法に基づいて、ボトムアップ的にスキーマを抽出している。このような語彙知識の獲得のプロセスは本稿が採用するネットワーク・モデルの構築過程と合致している。また、学習者の語彙習得の過程から考えると、松田（2004）の単一のコア図式による意味記述は抽象度が高すぎ、タイプごとの意味特徴が明確に反映されているとは考え難い。より具体的なレベルの意味的差異、プロトタイプ的な意味から周辺的な意味への拡張プロセス、また意味拡張の認知的動機づけをより明確に示すためには、コア図式だけでは限界があると考えられる。

そこで、本稿はコア図式の限界を補うために、Langacker (1991) が提唱するネットワーク・モデルを用い、「V1 + 込む」の多義構造を図 10 のように構築する。コア図式と比べて、図 10 は「V1 + 込む」の 3 つのパターンの水平関係、またスーパー・スキーマの意味との垂直関係の両方が見通せるため、学習者の語彙習得において極めて有益である。「V1 + 込む」の多義構造を立体的に構築できる点で、コア図式よりも優位性があると考えられる。

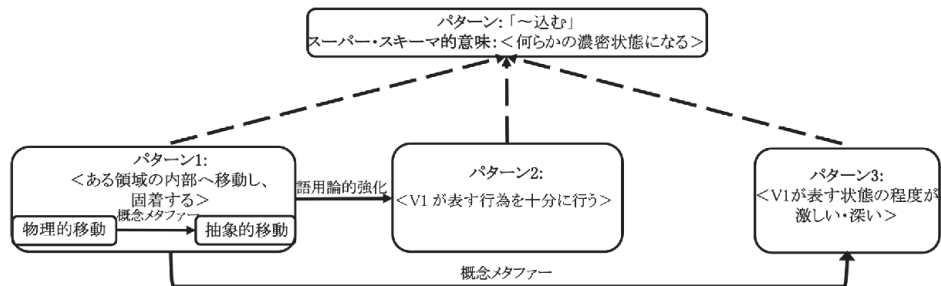


図 10: 「V1+ 込む」の多義ネットワーク・モデル

6. まとめ

本稿では、<原因（手段）・結果>の意味関係に基づき、「V1 + 込む」複合動詞全体の意味を 3 つのパターンに分類した。パターン 1 では、「V1 + 込む」に関わる身体的・経験的基盤<容器>のイメージ・スキーマの性質に基づき、特別なニュアンスは<固着する>という意味要素から生じたものであることを明らかにした。また、それらのニュアンスが松田の A タイプでも B タイプでも見られるため、パターン 1 に統合した。パターン 2 には、先行研究で特に注目されている「走り込む」、「磨き込む」のような何らかの目標が伴う語例以外、「買い込む」、「着込む」のように、目標を伴わず、V1 の「量的変化」によって「質的变化」が起こりにくい語例も存在することを指摘した。また、パター

ン2の獲得プロセスと動機づけには、「語用論的強化」が反映されていることを示した。最後に、3つのパターンに共通するスーパー・スキーマ<何らかの濃密状態になる>を抽出したうえで、「V1 + 込む」の多義構造をネットワーク・モデルで示した。

本稿は、母語話者の心理的実在、また学習者の言語習得のプロセスに基づき、「V1 + 込む」の多義構造を階層的なネットワーク・モデルで示したものである。今後、同じく内部移動事象に関わる複合動詞間の異同を考察する際に、イメージスキーマ理論の援用、またカテゴリー化のネットワーク・モデルの構築が期待される。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照—動詞の意味と構文』 大修館書店.
- 陳奕延・松本曜 (2018) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体型—コンストラクション形態論とフレーム意味論』 ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗 (2002) 「メタファーと意味の構造的性: プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から」 『認知言語学論考』 2, pp. 25-109.
- 早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』 研究社.
- 姫野昌子 (1978) 「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞類」 『日本語学校論集』 5, pp. 47-70.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房.
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房.
- 松本曜 (2009) 「多義語における中心的意味とその典型性—概念的の中心性と機能的中心性」 『Sophia linguistica』 57, pp. 89-99.
- 山梨正明 (2001) 「認知能力の反映としての言語—ユニフィケーションの視点」 『日本認知言語学会論文集』 1, pp. 186-200.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. vol. II : *Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』 研究社.)

Talmy, L. (1996) Fictive motion in language and “ception”. In P. Bloom, M. A. Peterson, L. Nadel, and M. F. Garrett (eds.) *Language and Space*. Cambridge:MIT Press, pp. 211-276.

Traugott, Elizabeth Closs (1988) "Pragmatic strengthening and grammaticalization." *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Vol. 14.

辞典：角川古語大辞典（第2巻）

用例出典：Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）